

極寒の山頂で82日間の気象観測に成功！ 富士山測候所をつくった ある明治人の秘話



『芙蓉の人』 新田次郎著
(文春文庫)

認定NPO法人
富士山測候所を活用する会
理事

土器屋 由紀子さん

江戸川大学名誉教授、農学博士。1962年に東京大学農学部卒業。気象庁気象研究所主任研究官、気象大学校教授、東京農工大学教授、江戸川大学社会学部教授を歴任し、現職。「活用する会」公式サイト
<http://npofuji3776.net/>



野中到、千代子夫妻

夫・到 (1867-1955) は大学予備門 (現在の東大教養学部) を中退し、妻・千代子 (1871-1923) とともに富士山頂の冬季気象観測を敢行。その後は、山頂で通年観測ができる施設の建設に努めた。写真/東京管区気象台

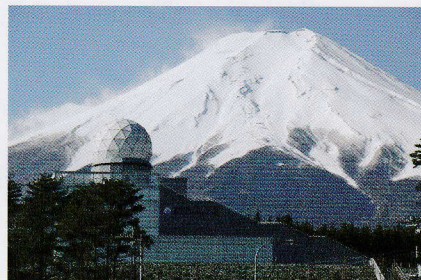
れていた明治28年 (1895) 2月。気鋭の気象学者・野中到は富士山の重要性に注目し、冬季初登頂を果たした。気象予報技術を大きく前進させるためには、富士山は文字通り「攻略しなければならぬ山」だった。

到には気象学者としての強い使命感があった。そしてそれを支える千代子の生命を賭した愛情がなければ、成し得なかったでしょう」と富士山測候所を活用する会の土器屋由紀子さんは語る。当初の計画どおりの越冬は叶わな

気象学者夫妻が切り拓いた 「通年観測」への第一歩

天気は高い空から変わる。富士山頂で通年観測すれば、日本中の気象予報に役立つはずだ――。

同年夏、到は標高3776mの剣ヶ峰に私財を投じて約6坪の野中測候所を建て、10月1日からデータ収集を開始。まもなく妻の千代子も合流し、極寒の気象と高山病に苦しみながら、二人で毎日2時間おきの観測を続けた。「功名心に駆られた冒険のようですが、



現在、測候所は無人化
レーダードームは山麓に移設

気象衛星の普及などで役目を終えた台風レーダーは、富士山レーダードーム館で展示保存。測候所は2004年から無人化運用となったが、「活用する会」による大気科学研究の場にもなっている。写真/やまなし観光推進機構



日本最高地点・剣ヶ峰に建てられた
野中測候所

気圧計を設置した機械室、薪炭室 (物置)、居室のみの観測小屋。現在の測候所が建設されたのは、1932年のこと (当初は観測所)。1964年には台風観測用の富士山レーダーが設置された。写真/ふじさんミュージアム

ったとはいえ、82日間の観測記録と感動的な夫婦の逸話は、時代を越えて語られた。語りべの一人には、気象庁時代に富士山頂気象レーダー建設に携わった作家、新田次郎がいる。到に褒章の話が舞い込んだ際「受けるなら千代子と二人でなければ」と固辞したという後日談を聞き、千代子を主人公にした小説『芙蓉の人』が生まれたという。これも、野中夫妻の絆を示す逸話だ。